

未成年

キューポラのある街

2

キューパラのある街／第2部

未成年

早船ちよ



理論社刊



キューポラのある街（２）

未成年

© 1967 年 11 月 第11刷

定価 380 円

作 者 早 船 ち よ

発行者 小 宮 山 量 平

東京都千代田区神田神保町 1 の64

発行所 株式会社 理 論 社

電話東京 (294) 6501 (編)

(294) 6504 (営)

振替口座 東京 9 5 7 3 6

未成年者は、
見るな
読むな
聞くな。
そして、
ものをいうな。





もくじ

- | | |
|----|-------------------|
| 1 | いちばんだいじなのは／5 |
| 2 | ピョンヤンから／22 |
| 3 | 手に負えぬ十七才／31 |
| 4 | 考える十五才／45 |
| 5 | もしもニセ札なら／62 |
| 6 | 手に負えぬ十五才／76 |
| 7 | 二つの顔／88 |
| 8 | それよりもつとだいじなこと／101 |
| 9 | 市街戦／116 |
| 10 | 半ば人足ばかり／137 |



- 12 未成年といつてほしくない／165
- 11 寝てると腹がへる／151
- 13 大人の陰謀／177
- 14 くさい怪文書／191
- 15 しごとに学ぶ／199
- 16 怒れる若ものの群／214
- 17 第三のグループ／222
- 18 赤い炎のように／241
- 19 水の炎／257
- 20 じぶんの場で／273
- あとがき／295



画・表紙・とびら
鈴木義治
カット
久米宏一



リリリ、リ、リリ……。
四時半きっかりに、しごとじまいのブザーが鳴る。

リ・リ・リ、リリリ・ジー……。

大宮シルク工場の広い工場の構内の隅^{すみ}ずみにまで、その金属的な音はひびきわたって、余韻^{よゐん}ものこさずに消えていく。

機械器具修理部の、ジュンの作業机の上は、そのときまでには、きちんと片づいていた。卓上ボ^{ばん}ール盤やグライNDERは、きれいに拭^ふきこまれ、

1 いちばん だいじなのは

工具は工具棚へ、油布^{あぶらふ}きんも所定の場所に、たたんでおかれる。窓ぎわの松葉ぼたんの鉢^{はち}は、たつぶり、水をもらったばかりで、すがすがしい水玉を光らせている。

ジュンは、トイレへもいって、油で汚れた爪にブラッシをかけ、髪^{かみ}も梳^すいていた。

四時半以後のじぶんの時間へ、個人的なその生活時間へ、一分でも、勤務の範囲に属しているものごとが食いこまないように——それまでに、すっかり、しまい、しておくのだ。

終業のブザーが鳴りだしたら、まっさきに職場をとびだして、それが鳴り終わらないうちに、タイム・レコーダーのカードを押す。それから、食堂がひらくまでの十五分間を、ジュンは、どんなに貴重なものにしてきたことだろう。

自治寮二階の第三室に走ってかえると、まず作業衣をぬぎすて、県立第一女高の制服にきかえる。紺の上衣にスカート、まっ白いブラウス姿を、柱鏡にうつしてみる。△脱皮▽ということばを、ジュンはそのたびに思いだす。

ロッカーをあけて、ひるまの機械修理女工の脱けがらをきちんとしまい、数学の教科書や、英語のリーダー、製図用具をそろえて、通学用の手提げかばんへいれる。

このとき、ジュンは、完全に高校生になっている。中学を卒業してからすぐ、この大宮シルク工場へはいった。それから二年半になる。そのまに、労働者と学生という、二つの生活の切りかえが、自然にできるようになってきた。……そうだ。英

語のリーダーの手ざわりだけで、労働の疲れさえもわすれ去っていくようだ。

——そうよ、あたい、定時制だからって、ノンコや、同窓生の誰にだって、勉強では負けたくないわ。

昼の高校生が二年生でマスターしてしまったこの英語のリーダーを、ジュンたち定時制の三年生は、まだぐずぐずと、やり終えないでいる。全日制が三年間にやる数冊の英語の教科書のうち、ジュンたち定時制は、四年間に三冊やればいいことになっていく。——それを知ってから、ジュンは焦りだした。ジュンは自分も、グラマーの教科書と、全日制で補習する五、六冊のテキストをも併せてやろうと決心したのだ。

——そうよ、あたい。昼の高校へいつている磯貝せつ子にだって負けやしない。実力がないなんて、いわせないわよ。

もっといえば、北朝鮮の祖国へかえった金山ヨシエに対しても、しごとと勉強の両面で負けたく

ないのだ。

英語のリーダーのページを、ばらばらとめくってみる。

——Mechanical…… Mechanism……

ふと、口をついて出た単語の意味のちがいが、ジュンをとまどわせた。

「機械的の——と、機械装置、あるいはその機構ということ。このちがいは、何だろう」

ジュンは、リーダーをひらいたまま、未知なものを、はじめて見出したような、おどろきの目を、そこに凝集させて、考えこんでしまう。

《メカニズム》——それは、ジュンたちが修理部で使っている、チャチなグライダーや卓上センパン。そして、おやじの辰五郎の誇りたかい、たった一トン半のキューポラ。——ジュンの生まれ育った鋳物の街・川口の五百以上もある町工場のどこでも、お目にかかれるメカニズムである。「それにしても、メカニズムって、いったい、なんだろう」

工場は、図体の大きいメカニズムだ。その機構のなかで、追いとばされるようにして、くるくる働き、くたくたに疲れ、時間と追っかけっこをしてくらす毎日毎日——

《ジャスト・イン・タイム》ということばを、工場長は口ぐせにいう。メカニズムも、材料も、人も、びたり、ある一点に集中して、しごとを進めていくやりかただ。

セリブレーンやデニールが安定した、一本の美しい生糸を繰り、生みだすために、動力のスイッチが正確に入ったとき、機械は、まえもって整備点検されてるから、するするっと停滞することなく動く。繰糸工場には、自動繰糸機にむかって、繰糸工が配置されている。その人の指は、一秒の狂いもなく、繰糸機の回転数にあわせて動く状態になっている。そこには、人間はいらない。指の技術が必要なだけ。働いている人間としての、人間らしい感情や、「おしっこしたい」生理なんかも、入りこむ余地がない。

「近代的な工場として、機械のオートメ化ばかりでなく、工程も、設備も、オートメ化されねばならぬのだ」

工場長は、得意になってお説教する。

「大きな自動車会社を見学してきたがね。生産の合理化による、工場ゼンたいのオートメ化は、ウチより、ずっと、徹底しておった……」

——たくさんの下うけ業者からはいつてくる、無数の部品が、きめられた時間に、きめられた場所へはこびこまれ、生産システムに組み入れられる。ジャスト・イン・タイム。一秒の狂いもない。それは、コンベアにのつて、流れてくる品物の所定の部分へ、とりつけられる。工場には、材料置場や部品倉庫はいらなくなり、資材を管理する人手のムダもはぶてくる。スペースと人手を、ぎりぎりに切りつめて、コスト・ダウンしていくのである。

「いや、見事なものだよ。わしは、すばらしいオートケストラのタクトを振る手を見た気がしたよ」

工場長は、ここ一年来、寝ても覚めても、工程分析や作業分解に、首ったけ、つかりこんで、夢中になっている。そのとばかりを、直接うけて、ふりまわされるのは、現場事務所にいる前宮トモだ。

——かなわんわ。——ねえ、油、たんまり抜かれちゃった。

へたりこんでも、ユーモアを失わない彼女は、青い顔をして目をくぼませていても、油の抜かれっぱなしというわけでもない。

人間はともあれ、八百万円以上もする自動線系機のメカニカルな動きにガタがくると、おいそれと、取っかえがきくわけではない。ジュンらの修理部の能力で、直せる限度も知れたもの。外部から入ってくる原料マユにもムラがあつて、かならずしも、ジャスト・イン・タイムにのらない場合がある。

——キカイが不きげんだと、こっちは、ごきげんよ。

そんなときは、のうのうと、息がつけるのだ。
寮の部屋の障子しよじが、らんぼうにあいた。勢よく部屋へかけこんできた娘たちのひとりが、ぱつと、ジュンの肩へとびついた。

「ねえ、ねえつてば、ジュン！ もし、今夜のおかず、カレー・シチューだったらどうする？」

同期に入った、繰糸部のサエ子である。

「ジュンはさっき、カレー・ライスだっていつてたわね。だけど、カレー・シチューだって、カレー粉の匂い、するわけでしょ」

サエ子は、返事をしない、ジュンの顔をのぞきこんで、

「あら、ひどい！ きいてないの」

いきなり、平手で、びしょんと、ジュンの手をひっぱたく。

「ひどいわあ、ジュン……なんて、ガリ勉もうじやのガリガリ亡者もうじやなの。ふん、英語のリーダーなんか見せびらかしてさ。高校へいくからって何よ。たかが定時制のくせにさ」

びしょんと、もひとつ、ジュンの手をたたくと、さつと、食堂の方へとんでいく。

「わあっ！ 痛た」

サエ子にとびついていつて、なぐりとばしてやりたい。ジュンの怒り顔を見て、部屋の誰もが、わっはっは、あっはっは！ 笑いだした。その笑いのなかには、

（サエ子のいうとおり）

（いい気味！）

（ジュンつて、いつも生意なまいき気で、えらそうぶってるんだ）

そういう、それぞれの露骨ろこつな反感がこめられていた。

「わあーん！ やられちゃったあ。ビンタ、二つも食くっちゃった」

ジュンは、べそをかいてみせた。

「ええじゃんか、ええじゃんか」

「夕めしまえの、オヤツになるわよ」

もはや、ジュンは、手の甲がまっかになったの

も、気にしていないふうで、学校行きの手提げかばんをとりあげる。

怒りをぶつつけられない口惜しさで、もやもやしている——その感情を表にださないだけである。(だしたら損だ。同情されるどころか、ひと一倍反感を買うばかりだ)——そうした集團のなかで、この二カ年余を生きてきた打算とちえのようなものが、ジュンなりに身につけてしまっている。

前宮トモは、部屋長らしく、とりなす。

「はははは。おサエなんて、がらっぱちなんだから、いちいち、気になさんな。わたしらとおなじで、根はいい子なんだ」

彼女の人柄そのまま、明けすけの笑顔でそういつてから、急に声をひそめた。

「ジュン……あのね、青婦部長が……」

「サユリさん？」

組合の青年婦人部長の岡田サユリなら、おなじ金町中学校出身の先輩で、やはり野田先生の教え子である。ジュンは、この大宮シルク工場へ就職

のとき、世話になっている。

「そう、彼女があんたに、夏期闘争の打ち合わせの集会に出てくれないかってさ」

「ふうーん、サユリさんが……？」

「いいや、ほんとはね、組合からの要望で、そういつてきた」

「サユリさんが、そういつてたわけではないのね」

「まあね……でもね。彼女も、そういつてないわけじゃないけど。……組合からの要望として、八時からの集会に、今夜はみんな出るように——つてね」

「八時ね。それまでに戻ってくるの、むずかしいわ……やっぱし」

ジュンは、そういつて、首をかしげたまま、考えこむようすをする。

——じぶんたち夜間高校生なんか、あてにしないで、組合は、きめたことだけ知らしてくれればいい。反対はしないんだから。

ジュンは、この大宮シルク工場へ就職したとき、この修理部の女子工員であると同時に、ユニオン・ショップ制の組合の一員にもなったわけだった。しかし……組合員という自覚はあまりなかった。賃上げ要求も、年末闘争も、ジュンと直接かわりのないところで、組合というものを代表した誰かが——それは、サユリやトモをもふくめて——やっていることだった。ジュンに、定時制高校があるように、彼女たちには組合がある。そういう感じでしかなかった。

「八時までには、ムリかねえ」

（知ってるくせに……）と、ジュンはうなずく。

今夜は、県立第一女高定時制の終業時間は、八時四十五分。クラブ活動のピンポン部に残らないとしても、寮へ帰ると、九時半はすぎるだろう。

「夏期手当て十二割は、みんな、どうしてもがんばらなきゃね」

トモは、いつもとちがって強引^{ごういん}だった。ジュンの肩を、そのがっしりした腕でかかえこむように

抱いて、ふたたび、いった。

「ね、あんたも、打ちあわせ会から顔をだしたほうがいいのよ」

「まかしとくわ、きめること。すまないけど」

「出てちょうだい！」

きっぱりと、命令するみたいな口調だ。

「みんなで統一行動をとるためにも、こん夜は、出てちょうだい。勉強は、あとからでも、あんたなら、取っかえしがつくでしょ」

「でも、……みんなに悪いけど、あたい……」

そういつて、二カ年間、いつも、ことわりつけてきた、かたくなな、思いつめた目いろだ。

定時制だと、授業を受けるときしか、自分の時間がなく、勉強の自由がない。ジュンは、批難の眼が、まわりじゅうから身につきささるのを、じつと耐えている。

「どうして、ジュン？」

「……」

「どうしても、だめ？」

「でも……でも、大学入試に、昼の高校生に負けたくないのよ」

おもわず、いつてしまつて、はつとした。いいたくなく、知られてはならないことだった。

トモは、眼をふせたジュンの肩に、手をおいた。「ボーマス闘争は、ここんとこ、むずかしくなつてねえ。みんなが、ジュンみたいに、任せておんぶでは、なかなか、かちとれそうもない情勢になつてきているのでねえ……」

トモは、ひどくがっかりしたふうに、大きなため息をついた。

「この班の出欠は、わたしが責任をもっているんだよ。……頭へきちまうな」

「ごめんなさい、室長さん。……あたい、こんど、三年生になつて、やつと勉強が何だか、わかりかけた気がするんです。……だから勉強したくて、勉強したくて……昼の高校へいつてる子に負けたい、何かそんなのちがう勉強がしたいんです」

ジュンは、ちらつと腕時計をみた。

（四時五十分……ごはんをすまして、早く学校へ出かけなきゃ）

「ジュンの気もち、わかるけどさ。組合の立場も、よく考えてみてちょうだいよ。物価はぐんぐんあがる。賃銀は依然としてひくい。こんどの夏期闘争がかちとれなかったら、男の工具や世帯持ちに突きあげられて、こと重大なのよ」

「でも、どうせ、会社は承知するんでしょ。糸値が上っているようだし、会社の景気はわるくないんでしょ」

「会社は、何といつてるか。あんた、知つてる？」

「いいえ」

「そうら」

トモは、ジュンの鼻を、ひとさし指でつついて、ははははーと、笑う。

「勉強もさることながら、あんたのような子が、じぶんのだいたいな経済生活に、無関心ではいけない——そう、サユリさんもいつてたわ」

——いま、大宮シルクがつくつてゐる生糸製品

は、二十一デニール中心の、いわば太番手^{ふとばんて}だから、原料マユをよけいにこなしただからといって、それがすぐ、会社のもうけにつながってこない。糸値がいい、といっても、それは敏感に原料高・原料難になって、はね返ってくるのだから、手放しで喜べない。——そう社長や現業長がいつている。だが、それはごまかしなのよ。

「……まあ、学校が大事なら、いいからジュン、いっというで。今夜の集まりには、ジュンのぶんまで、がんばるわよ。学校からかえったら、会社のようを聞かしてあげるね」

ジュンは、やっと解放された。食堂へとんでいった。いつもより二十分ちかくおそかったので、どうやって、メシを胃袋へ流しこんだか、覚えていなかった。猛スピードで、夕食をすませた。かけ足で、正門へとんでいきながら、ふと、トモのことばが、気持にひっかかった。

——じぶんのだいいな生活……じぶんのだいいな経済生活……。メカニカルとメカニズム。

「いつてきまーす、おじさん」

外出の門鑑^{もんかん}を投げるように渡し、正門をとびだす。

——もしかしたら、一時間めの音楽の授業に、おくれるかもしれない……。

ジュンたちの定時制高校では、一時間めは、音楽が体操か、ホーム・ルームの時間にあてている。一クラス五十人ぐらいの、四クラスで一学年。それが、四年の卒業期までには、半減して二クラス編成になっている。たいていの生徒が、昼は勤めをもって働いている。五時半の始業、かつかつに、かけつけられるのは、勤め先の条件がいいもので、半数以上は第一时限の終わるころ、おくれて教室にとびこんでくる。

バスの停留所へ、ジュンは、得意のかけ足で、すっとなでいく。バスと競争で、やっとかけつけた。バスは公満員^{こうまんぎん}の札をかけていて、停車しないで、いつてしまう。

(ちえっ、ついてないなあ。あと五分……つぎの

バスを待つ間だけ、音楽の時間、遅刻かもしれないわ)

ジュンは、このあたりに、やたらに工場や住宅が建って、いつもバスが混むのをふんがいた。しかし、よしんば、十分おくれたって、音楽なら、大目に見てもらえるのだった。

ほんと、後ろから、肩をたたかれて、ふりかえった。

「ああら！ サエ子」

「さっきは、ごめんね、ジュン。あたい、すぐ、かあーっと、頭へきちゃうんだ」

「ひどいこといったわね。——あたい、すぐクシヨックだった」

「気にしないで。——それよりか、だいたい話があって、追っかけてきたのよ。あんた、さっき、トモさんに何をいわれた？」

「……………」

「ふふん、わかってるわ。組合の集まりへでろって、狙い討ちされたんだろ」

「あなたは？」

「でるもんか。でないほうがいいんよ」

「え？」

「そういうところへ顔をだすと、あんた、労務からにらまれて、損をするわよ」

「夏期手当、十二割をがんばらなきゃ——って、室長さん、いってたわ」

「そりゃ、そう。出すものなら、もちろん、いただし、だわよ。だからって、上から睨まれてまで、やいやい騒ぐことはないわ」

「みんなしてやらなくちゃ——って、いってたわよ、室長さん」

「見ててごらん。かしこい人は、あんまり、目立つことをやらないから……。せいから、あたいたちは、働いて食っていかなきゃならないでしょ。そういう家庭の事情なのよ、ね。——そういう生活を、あたいたち、だいじにしないと」

ジュンは、びっくりしたように大きな目をみはって、サエ子を見返した。——働いて食う生活を